

とことん自分と向き合いたい、秋

令和7年10月14日

ノーベル賞の授賞。自分のことのように喜ぶたい。

10月6日、2025年ノーベル生理学・医学賞を、坂口志文大阪大学特任教授と米国の2氏に授与が決まった。内容は、「体内の過剰な免疫反応を抑えるリンパ球の一種「制御性 T 細胞」の発見」である。授賞の理由は、「免疫応答を抑制する仕組みの発見」をし、「研究分野の基礎を築き、がんや自己免疫疾患などの新たな治療法の道を開いた」と評価されたものである。坂口教授は、テレビで「うれしい驚きに尽きる。研究がもう少し臨床の現場で人の役に立つとご褒美があるか」と思っていた。この時点で名誉をいただくのは非常に光栄だ」とコメントをされた（10月7日静岡新聞）。

続いて、10月8日、2025年ノーベル化学賞を、北川進京都大学特別教授と英国、米国の教授に授与が決まった。内容は、「金属有機構造体の開発」である。授賞の理由は、「無数に開いた微小な穴に物質を出し入れできる新材料を作製し、二酸化炭素を回収する「夢の吸着剤」など環境分野への応用が期待されている」と評価されたものである。大量の気体を構造体の中に出し入れできることを立証したことへの驚きを報道される中、北川教授は、「昨日までただのおっさん」、発表当時は「うそつき」呼ばわりされたことなど、周りを笑顔にしながら、テレビで「大きな名誉を頂き、非常に感激。新しいことにチャレンジすることは科学者にとって醍醐味だ」とコメントされた（10月9日同新聞）。

お二人の研究に関しては、私は、「すごいことだ」と心から思うし、坂口教授は、「もう少し、臨床（研究をもとに実際に薬や、治療など、直接人に影響を及ぼす場所）の現場で人の役に立ってから」と述べたり、北川教授は、「新しいことにチャレンジし続ける」と述べたり、そのマインド、謙虚さに触れ、偉大さに圧倒される。

私には、研究はわからない。けど、私は、自分のことのように嬉しい。なぜか。その言葉の端々から、同じ人として、「何かに一生懸命に打ち込むこと、とことん突き詰めている人が、ここにいる。」という喜びと、安心感を感じることができるからである。私たちの社会は、そ

れぞれが役割を持って構成されている。うまくいかず、ネガティブな心に支配されそうな時もあると思う。でも、一方で、何かにとことん向き合って、新しいことにチャレンジし、それを何とも思わない（ように見える）人がある。教職員、高校生一人一人も、皆、とことん一生懸命向き合っている。だから、嬉しいのである。



PhotoAC フリー素材

3年生の進路面接、2年生のタンタンタイムのG発表、1年生の部活動

最近の生徒との関わりから。秋は、とても大切な時期である。一つは、今年の収穫（一定の成果）。一つは、次年度への種まき（次への準備）。それらを、生徒に無意識（意識的にしているかも？）に発揮させるのが、学校の様々なカリキュラムとも言える。

3年生は、就職や進学などの面接指導で関わりがある。私のところに来るまでに、担任、学年、（保護者も）など丁寧な指導を受けてくる。生徒はしっかり受け答えしてくれるが、これは自分の学びに気づくことのできる、とても大切な作業である。2年生は、タンタンタイムの発表を評価するという関わりがある。全てを見たわけではないので、今後の学年発表が楽しみだが、「YOUは何しに富士宮に？」とインタビュー調査を行った発表など、高校生ならではの視座を持ち始めていることも見受けられ、人に発表するというのは、とても大切な作業だと感じている。1年生は、部活動で活躍の場を広げている。男子バスケット部の公式戦を見た。1年生が先輩に助けをもらいながら、先輩を助けながら、活躍している。チーム力が上がっていくのはそういう時だ。先輩と共に何かをするのは、とても大切な作業である。秋は、今、取り組んでいることに、とにかく、とことん本気で向き合ってほしい。

私も、とことん自分と向き合おう

生徒たちの頑張りを見て、私も本当に毎日悩んでいる。そして、自分と向き合っている。

みなさん、高校は、どんな場所であって欲しいでしょうか。富士宮北高校は、生徒たちの進路や地域性から「社会に近い」学校だとを感じる。そして、そんな本校の生徒だからこそ、必要なことは、自分で、真剣に人生を見つけることができ、キャリア意識を持つことではないかと思う。さらには、富士宮全体を盛り上げ、守り、未来に向かって地域を支えていく人材を育成できる、そんな高校でありたい。

それでいうと、本校に必要なのは、もっと、全体を整理し、余白を生み出し、学校外(社会)との連携を強めながら、自ら学ぶことを身につけていくカリキュラムなのではないか。一方で、本校の強みは、チーム力であり、生徒の柔らかなキャラクターであり、教職員の熱心さと、それを引き受ける生徒の関係性にある。これを失うことは絶対にできない。つまり、教員が伴走して、共に歩んでいくことである。これらを全て、ゆるく、柔軟に包み込める学校にしたい。

それは、自ら選択が可能な、

「ALL IN ONE」な学校

ではないかと考えており、

イメージ図にしてみた。

今、日本社会は大きく変化する時期を迎えている。

おそらく、これまで通りでは

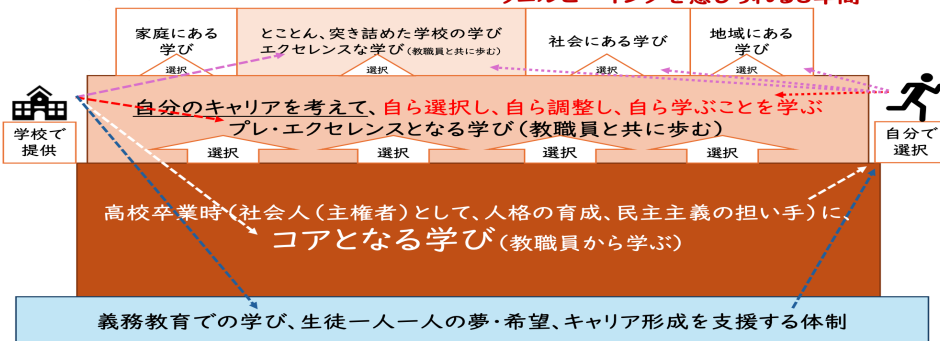
淘汰される。そこに、私自身

とことん向き合おうと思って

いる。これは秋しかできない

富士宮北高校全体のカリキュラム

生徒エージェンシー・コンピテンシーの育成 ウェルビーイングを感じられる3年間



富士宮北高校で学ぶ意義を高める！「材」に気づく授業を考える

今年、本校の教員は、「新しい視点」を持って、授業に取り組んでくれている。これまでにチャレンジしたことのない教授方法に取り組んでいる。昨年、授業に対する評価として「わかりやすく学力がつく授業を行なっている」は92%が肯定する回答であった。しかし、それは、常に更新しないと、惰性になっていく。良い学びを得るためには、生徒たちも保護者の皆さんも、授業に対しては、しっかりと「自分ごと」として見ていただきたい。

さて、石井英真准教授(京都大学大学院教育学研究科)は、この授業という営みは、「教師と生徒、生徒と生徒の一般的なコミュニケーションではない」と言い、「材(教材や主題や学習材)」を介した教師と生徒、生徒同士のコミュニケーションであると言う(月刊高校教育2024.6月号、22p)。石井教授は、時々、学習者中心か、教師中心か、などと語られる二項対立の議論がなされるが、授業の本質的特徴を見落としているという。

少し難しい話になるが、最も大切なことは、生徒が、この「材」に深く没入されていくことであると言う。「材」を介して、教師と生徒、生徒同士が向かい合い、ともに「材」に挑む三角形の共同注視の関係性」(同、23p)であると言う。特に高校はこれこそ大切だと私は思う。この関係性が、学校の外に飛び出していくのが、総合的な探究の時間であるとも言う。つまり、授業は、この「材」の存在に気づくことが、何よりも、学ぶ意義の入り口だと言える。本当は、さらに、そこから実際の生活や社会課題に即した問題、オーセンティックな課題になっていくのだと思うが、まずは、「材」の存在に、学校の授業で気づきたい。そのために、それを全ての生徒に届く方法を持った学校でありたい。これは、教員のプロフェSSIONナル度の課題でもあり、生徒にとって、高校で学ぶ意義でもある。多くの大人が、社会に出てから、「もう少し学んでおけばよかった」と呟くの聞く。生徒のみなさん、「好奇心」は「面白い」と思っ

て聞くことから始まるし、面白くないのであれば、なぜ、面白くないのか考えてみるのも楽しいでしょう。保護者のみなさん、まずは、学校は「面白い」学びがある場所と思い出して、子どもの背中を押してください。最近の秋は、温暖化の影響なのか、猛暑、(酷暑)、残暑と、あっという間にくる冬の間に挟まれて短くなっているそうである。

秋は、〇〇な秋として語られるが、じっくり、自分と向き合ったり、考えを深めたりするには、とても良い時期だと思う。ぜひ、とことん、学ぶ意義とも向き合ってみてください。

→秋らしく金木犀全開

